

「賀川豊彦のお宝発見」その3

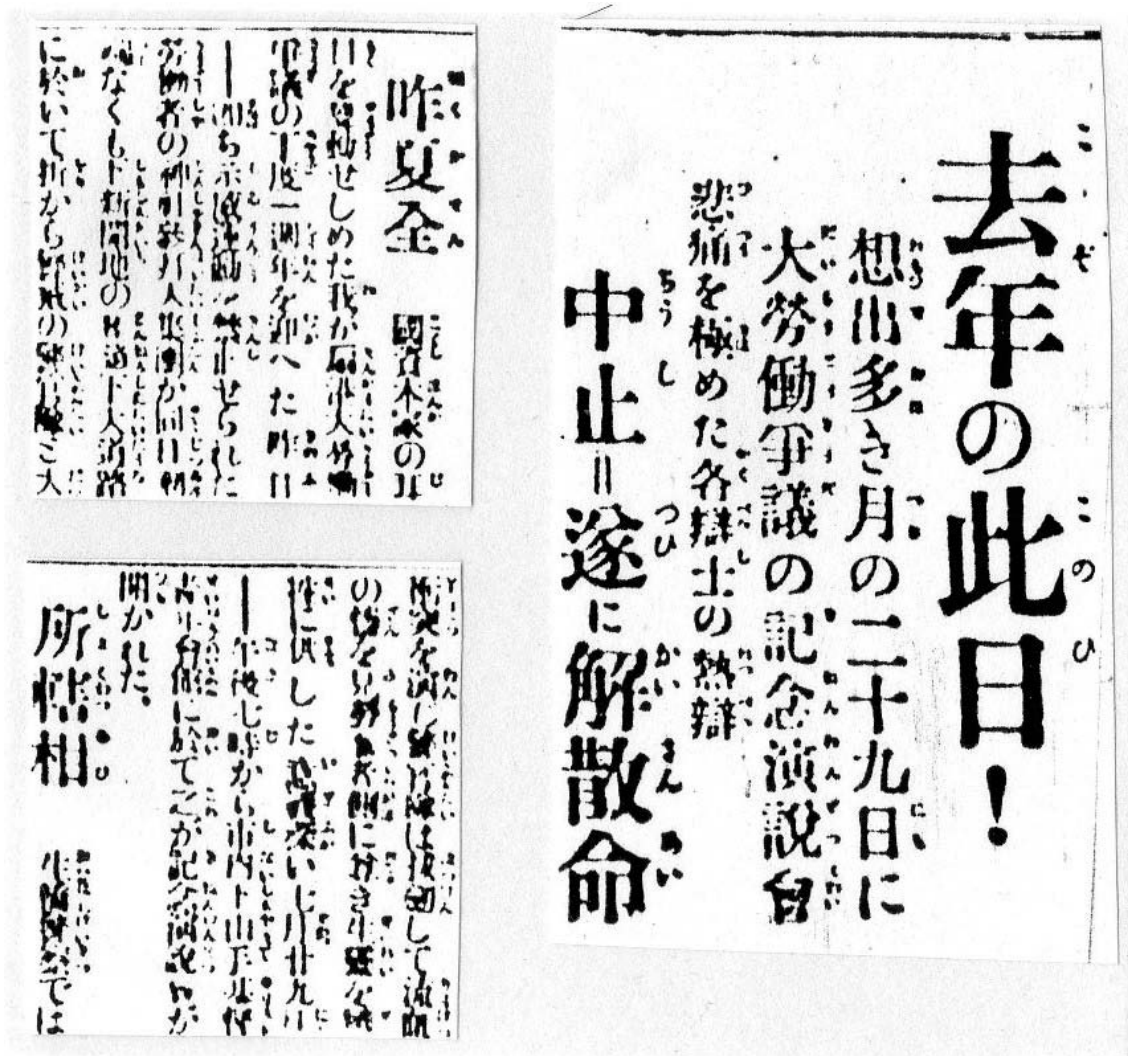
新聞記事にみる賀川豊彦 (18)

1910 (明治43) 年~1963 (昭和38) 年 (神戸版)

第18回 「大争議1周年」「賀川筆禍事件公判」他

「大労働争議1周年記念演説会」

1922 (大正11) 年7月30日「神戸又新日報」



開行に先づ警官二十數名を派遣し  
場内の警備に努め立出口には三名  
の正服巡査が警備を充らせて場へ  
てゐる物々しい光景に、記者は  
胸を增加して階上階下に降り  
た。

### 榮業服

をまた行政長

職員が威風のよい面持ちで「年は  
舞ひ去る年の今日は一」と一種  
云ふに云へない悲願の聲を聞かせ

願をなげき去る急よ凶徒にける  
勢頭尾川林義代が「刑れされば我  
れ先の死なん」と断し演壇に降り  
「今夜に限り所の如く警官の監視  
せらるゝは、警官監視にまじい」  
と絶叫するや、

### 中止を

命ぜられ

は徳立ちとなり「警官監視」  
「押迫を叫んで少時騒々致々たる  
状態に陥つたが司會者の注意で漸  
く元の静態に降り大いで資本家  
は「資本は儲物、資本家は凶賊」  
の叫下に滔々資本主義を成す

### 注意の

押迫を介ひつ

つ最後に「一年の今日今日我々一  
方の儲者の運持となつてくれた常  
舞は全く警官が監視した為めだ

と喝破して是亦中絶に仕舞ひて  
「力に負えずも口舌なら、不  
加断作「吾々は金の世界のを金  
得る権利あり、口舌第一、兎もへ  
と資本主義」今宵一編  
の演氏の「警官監視にまじらた」  
の後

### 賀川豊

石氏が百席の

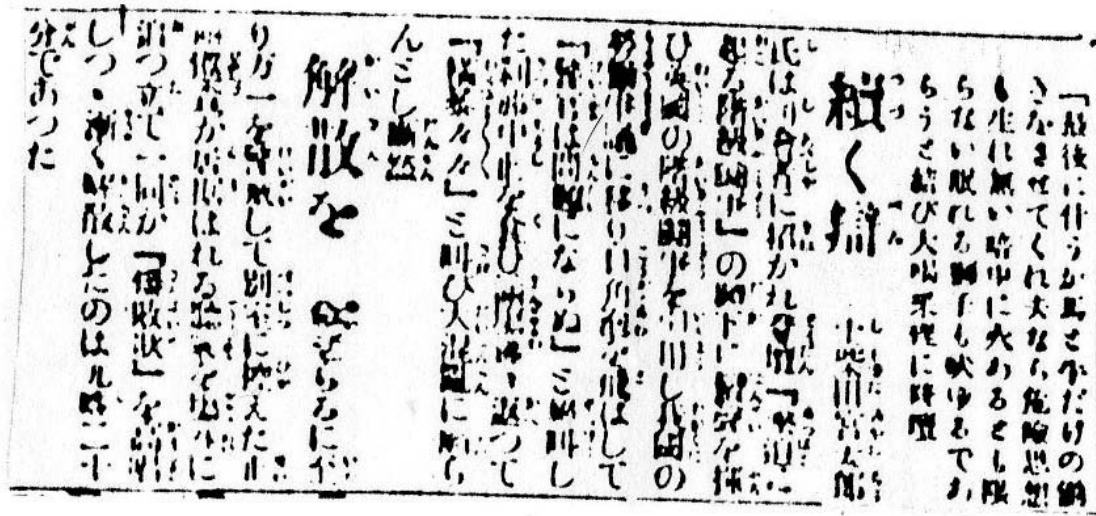
「き拍手に迎えられて舞台上に現は  
れ「恐みを存んで一年」と断し例  
の皮肉たつぷりの口調で「演説を  
き一年を経過した今日、諸君の  
に立ち官憲の警備、資本家の儲  
を叫ぶのも大膽な言である。然し  
若し資本家百席が如何に労働連  
物に軍用を加へても現に今日の如  
く、労働物は日増えつ

### 長足の

進歩を成しつ

つあるではないか、また日新しい  
労働連の運業にしても労働者に  
有利な解決に陥した恐らく「労働連  
は諸君も、年後には自ら此舞台上に  
立ち労働演説を初めるであらう」  
と皮肉り演説の警官に「警を充  
れては業を成はせ

つあるではないか、また日新しい  
労働連の運業にしても労働者に  
有利な解決に陥した恐らく「労働連  
は諸君も、年後には自ら此舞台上に  
立ち労働演説を初めるであらう」  
と皮肉り演説の警官に「警を充  
れては業を成はせ



こぞ このひ  
**去年の此日！**  
 想出多き月の二十九日に大労働争議の記念演説会  
 悲痛を極めた各弁士の熱弁  
 中止＝遂に解散命

◆ 昨夏全国資本家の耳目を聳動せしめた我が扇港大労働争議の丁度一週を迎へた昨日——即ち示威運動を禁止せられた労働者の神社参拝大集団が同日果敢なくも下新開地の屯道下大道路に於いて折から警戒の警官隊と大衝突を演じ警官隊は抜剣して流血の惨を見労働者側に尊き生霊を犠牲に伏した意義深い七月廿九日——午後七時から市内下山手基督青年会館に於いて之が記念演説会が開かれた。

所轄相生橋警察では会開に先ち警官二十数名を派遣し場内の警戒に努め玄関口には三名の征服巡査が短剣を光らせて構えている物々しい警戒裡に聴衆は刻々増加して階上階下に満ち満ちた頃

菜葉服を着た行政長職員が感慨の深い面持ちで「年は過れど去年の今日は——と一種云ふに云へ無い悲痛の声を震はせ簡単な挨拶を述べ愈よ演説に移る其時尾川林蔵氏が「倒れざれば我先づ死なん」と題し演壇に登り「今夜に限り斯くの如く警官の臨監せらるゝは言論圧迫も甚だしい」と絶叫するや忽ち

中止を命ぜられ聴衆は総立ちとなり「警官横暴」「言論圧迫」を叫んで少時喧々譁々たる状態に陥ったが司会者の注意で漸く元の静寂に帰り次いで宮本義勝君「資本は魔物、資本家は盗賊」の題下に滔々と資本主義を破壊

注意の連発を食ひつつ最後に「去年の今日今日我々一万労働者の犠牲となって倒れた常

峰氏は全く警官が伐剣した為だと喝破して是亦中止に仆れ続いて「力に屈服するは罪悪なり」小畑耕作「吾々は金の世界の金を得る権利あり」森口新一「呪ふべき資本主義」今亦一轄の諸氏の悲憤慷慨に満ちた演説の後

賀川豊彦氏が百雷の如き拍手に迎えられて壇上に現れ「怨みを呑んで一年」と題し例の皮肉たっぷりの口調で「懐出多き一年を経過した今夜諸君の前に立ち官憲の圧迫、資本家の横暴を叫ぶのも感慨無量である。然し諸君！資本家官憲が如何に労働運動に圧迫を加へても現に今日の如く労働運動は目醒めつゝ

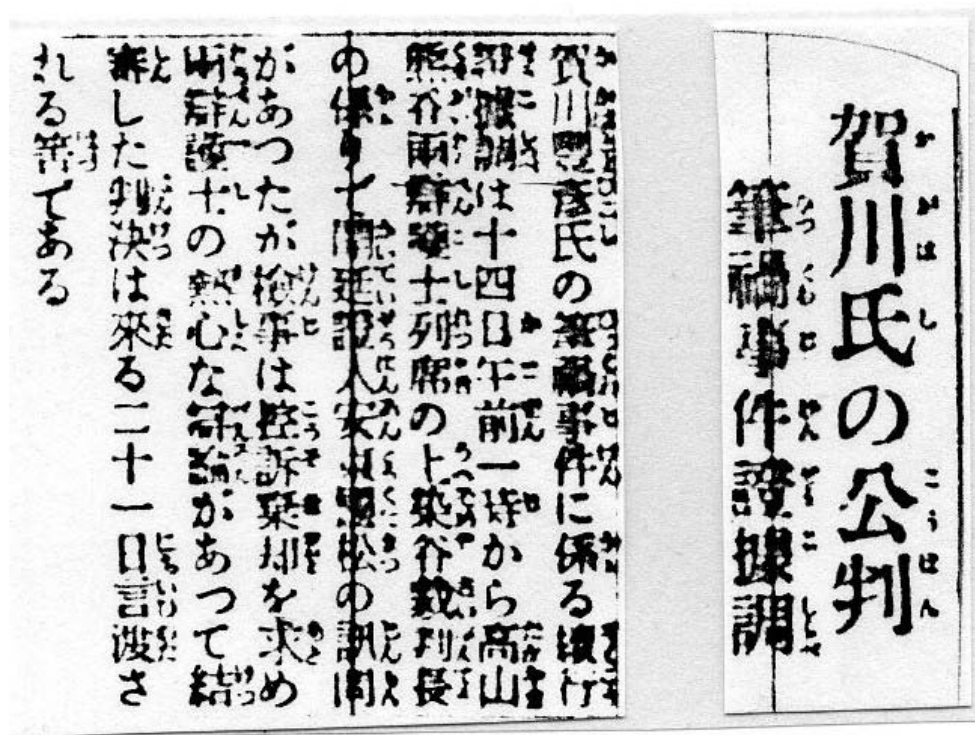
長足の進歩を果しつつあるではないか、まだ耳新しい阪神電鉄の罷業にしても労働者に有利な解決に帰した恐らく臨監巡查諸君も数年後には自ら此壇上に立ち労働演説を初めるであらう」と皮肉り臨監側の警官に一喝を呉れて聴衆を喜ばせ「最後に仕うか馬と牛だけの働きをさせてくれ夫なら危険思想も生まれ無い暗の中に火のあるとも限らない眠れる猛獅も吠ゆるであらうと結び大喝采裡に降壇

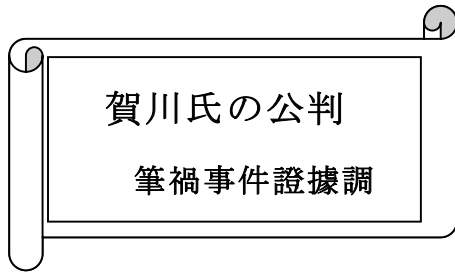
続く弁士柴田宮太郎氏は司会者に招かれ登壇「圧迫に怒る階級闘争」の題下に蛮声を揮ひ我が国の階級闘争を引用し我が国の労働争議に移り口角泡を飛ばして「警官は問題にならぬ」と絶叫した刹那中止を食ひ益々沸き返って「横暴々々」と叫び大混乱に成らんとし断然

解散を命ぜらるに至り万一を警戒して別室に控えた正服巡查が居、現れる聴衆を場外に追っ立て一同が「惨敗歌」を高唱しつゝ漸く解散したのは九時二十分であつた。

### 「賀川豊彦筆禍事件公判」

1922（大正11）年11月15日「神戸新聞」





賀川氏の公判  
筆禍事件證據調

◆ 賀川豊彦氏の筆禍事件に掛る続行證據調は十四日午前一時から高山熊谷両弁護士列席の上染谷裁判長の係で開廷証人安東国松の訊問があったが検事は控訴棄却を求め両弁護士の熱心な弁論があつて結審した判決は来る二十一日に言渡される筈である。



「アインシュタイン神戸に向かう」

1922（大正11）年11月15日「神戸新聞」

来朝の途にあり相対性理論のアイ  
ンスタイン博士は十三日上海に上  
陸新聞記者等と共に支那の城  
内の見物をした上支那料理を共  
にし「支那料理は原始的で懐しい

アインスタイン  
シヤンハイしつぱつ  
**上海出發**  
神戸に向ふ

野文は十四日午後三時上海  
戸に歸つたが十六日入港の機  
一日遅れて十七日になつたと（上  
海新聞）

があまり量が多過ぎい。もつと減らしたら可からう。」と催促に  
謝し謝死か避るのを見ては「あの  
吾等は自然に當んで居て氣に入  
つた。」と云つて居た。同夜は日本  
人俱樂部に於ける歡迎會に臨んだ  
が席上「私は日本の自然現象に驚す  
るのを樂しみにして居るばかりで  
なく日本の方々に相対性理論を平  
身に知らせることの出来るのを喜  
んで居ると云つて居た。因に北

アインスタイン 上海出發

神戸に向ふ

◆ 来朝の途にある相対性原理のアイNSTAイン博士は十三日上海に上陸新聞雑誌記者等と共に支那錦城内の見物をした上、支那料理を共にし「支那料理は原始的で懐かしい」があまり品数が多い。もっと数は減らしたら可<sup>よ</sup>かろう。」と愉快げに話し?列が舞るのを見ては「あの音楽は自然味に富んでいて気に入った。」と云って居た、同夜は日本人倶楽部に於ける歓迎会に臨んだが席上「私は日本の自然界に接するのを楽しみにして居るばかりでなく日本の方々に相対性原理を平易に知らせることの出来るのを望んで居る。」と云って居た、因みに北野丸は十四日午後三時上海出港神戸に向かったが十六日入港の予定が一日遅れて十七日になったと（上海新報）。



◆ 十二月十三日の午後は半日、アインシュタイン博士とすごした。アインシュタイン夫人のほか、改造社長山本實彦、理学博士石原純、稲垣通訳も加はり、六人で須磨の花月で食事し、海岸を散歩しながら語った。

ラテナウのこと、マルクスのこと、<sup>スイス</sup>瑞西のことなども話題になった。帰りの汽車の中で、ベルグソンの哲学をどう思ふかと尋ねると、ベルグソンは心理的時間をやかましくいひ、その上、時間を絶対的なものとするから、相対性原理に反するとアインシュタインは答へた。

前年バアトランド・ラッセルに会った時は、近寄れない人のやうに感じたが、アインシュタインは、柔和な人だといふ感じをうけた。アインシュタインは子供が大変好きな風であった。

大杉栄が長女の魔子をつれて話しに来て、フーブルの「昆虫記」を借りて帰ったのも、この年のことであつた。

十二月十三日の午後は半日、アインシュタイン博士とすごした。アインシュタイン夫人のほか、改造社  
長山本實彦、理學博士石原純、稻垣通譯も加はり、六人で須磨の花月で食事し、海岸を散歩しながら語つ  
た。

ラテナウのこと、マルクスのこと、瑞西のことなども話題になつた。歸りの汽車の中で、ベルグソンの  
哲學をどう思ふかと尋ねると、ベルグソンは心理的時間をやかましくいひ、その上、時間を絶對的なもの  
と見るから、相對性原理に反するとアインシュタインは答へた。

前年、バートランド・ラッセルに會つた時は、近寄れない人のやうに感じたが、アインシュタインは、  
柔和な人だといふ感じをうけた。アインシュタインは子供が大變好きな風であつた。

大杉榮が長女の麗子をつれて話しに來て、ファイブルの「昆虫記」を借りて歸つたのも、この年のこと  
であつた。

<参考>

横山春一『賀川豊彦伝』には、  
同年12月13日、賀川はアインシュタインと神戸で半日過  
ごした時のことが記されているので、参考までに。(警醒社  
版、186～187頁)

(2011年3月27日記す。  
鳥飼慶陽)